

# ウィトゲンシュタインの哲学的思考と実存的生の 相関について：鈴木氏への返答

鬼界 彰夫

## I.

鈴木氏の論文「「隠された意味へ」（『哲学宗教日記』訳者解説）の意義——ケルケゴール研究の観点から」は、ウィトゲンシュタインの「日記」の翻訳に際して私が執筆した解説を丹念に読解し、ウィトゲンシュタイン—ケルケゴール関係研究の「日記」発見以降の進展という観点からそれに独自の価値を認めようという試みであり、拙稿に対する氏の真剣な評価態度に深く感謝したい。

さて、氏がこの論文で私の解説に対して提示された問いとは、第七節「ウィトゲンシュタインにとっての哲学と宗教」に関するものである。そこで私は「日記」に見られる彼の生の変化（実存の変化）と『論考』を解体し『探究』の成立に至る哲学的思考の変化の相関について考察し、次のように結論した。

以上から、ウィトゲンシュタインにとっての哲学と宗教の関係について、すなわち彼にとっての思考することと生きることの関係について、次の二つのことが言えるように筆者には思われる。第一に彼の生と宗教は、彼の徹底した哲学的思考に導かれていたように思われる。（『哲学宗教日記』p. 313）

この結論とそれを支える叙述全体に対して鈴木氏は次のような疑問を呈している。

——このような哲学的思考における変化と宗教・倫理的生における変化は、そもそも必然的に平行するものではなければ、因果関係によって結びついたものでもないはずである。つまり、そうした哲学的思考の変化を経験しながらも、宗教・倫理的生においてはキリストを依然として現実に倣うべき理想として見なして生きていくとしても（あるいはその逆であっても）、あるいは、そうした哲学的

思考の変化を経験しながらも、宗教・倫理的生においてはそもそも理想という概念と何ら関わりを持たずに生きるとしても、とくに矛盾はないし、不誠実であるわけでもない(ように思われる)。それにもかかわらず、ウィトゲンシュタインにおいては、なぜこれら両者につながりがあり、さらにはなぜ哲学的思考の変化が宗教・倫理的生の変化を導くことになったのだろうか。(鈴木論文、p. 17)

ひとことで言うならここで鈴木氏は、ウィトゲンシュタインにおいては理想に関する哲学的思考が宗教的・倫理的生の変化を導いたという結論に至った私の考察が、そうした変化の連関をもっともなことと思わせるに足るウィトゲンシュタインの思考と生の変化の実相の叙述を欠いている、と指摘していると言ってよいだろう。と同時に氏は、その欠けている叙述を求めている。理想(論理に登場する理想化された諸概念)に関する哲学的考察と自分の生に関わる実存上の選択の間に概念的内在的な必然的関係が存在しないのだから、私の結論の妥当性を示すためには確かにこうした叙述が必要であり、にもかかわらず私の「解説」にそうした叙述はなく、その意味で氏のこの指摘と要求は当を得たものと言わなければならない。以下 III、IV において鈴木氏のこの問いかけに答えたいが、その前に「解説」第七節で扱われたウィトゲンシュタインの哲学的思考と生の関係という問題が、それ以降の私の研究の歩みとどのように関係してきたかを簡単に述べたい。

## II.

私の解説を読まれた少なからぬ方が気づかれたのではないかと思うが、第七節の考察は、解説のそれまでの叙述が日記の内容分析に基づいた具体的なものであるのに対して、より大きな問題に関する抽象的な考察という性格を持っている。それはウィトゲンシュタインの哲学的考察と生の関係という大きな問題に関する私見の仮説的提示という性格を抜きがたく帯びている。それがこの重大な問題に対して当時私の示し得る精一杯の考察であり、その不十分さを自覚しながらも私にはそれ以外に示せることがなかったのである。私にとってその考察は、ウィトゲンシュタインの哲学的思考と生という問題に最終的解を与えるものではなく、むしろその問題に初めて取り組む機会だった。それゆえ第七節は「解説」の最弱部分であり、同時にその後の私の考察の新たな出発点でもあった。その箇所を的確に指摘した鈴木氏はけだし慧眼と言うべ

きだろう。

「日記」が私に示したのは、ウィトゲンシュタインの哲学的思考と生の間に重大な、しかし表面的には不可視な、現実的連関があるということであった。そしてそれは、『哲学探究』とはいかなる書物か、という絶望的な問いにもし答えられる方法があるとすれば、この連関を糸口とする以外にはあり得ないことを意味していた。こうして一度はあきらめていた問いの考察が私の中で復活し、『探究』テキストの内在的研究と、その著者の哲学的思考と生の相関の研究を、分ち難い一つの探求の中に溶かし込んでゆくという果てしのない作業が始まった。その作業によりやく形が現れ、問いに対する答えが見える可能性が感じられたとき、既に10年以上の時間が経っていた。この作業の最初の成果が昨年10月に刊行した拙著（『『哲学探究』とはいかなる書物か』勁草書房）である。この書物は『探究』「哲学論」（§§89-133）の系統的読解を表面上の目的としているが、その作業のための必須の道具としてウィトゲンシュタインの哲学的思考と生の深い相関を考察するものであり、その意味で、そこ語られていることはここで示そうとする鈴木氏に対する回答と複雑に重なるものである。とりわけ第一章と第四章5.2.は大きく関係する。以下に示す回答は、この書物に対する補足的注釈と見なすこともできるだろう。

### III.

結論を先に述べるなら、「日記」の解説で私が示した「ウィトゲンシュタインの生と宗教は、彼の徹底した哲学的思考に導かれていたように思われる」という試行的見解に妥当性はない。彼の哲学的思考と実存的生の変化の相関に関する「解説」執筆以降の私の考察に基づけば、こう言わなければならない。『論考』から『探究』への移行期のウィトゲンシュタインの哲学的思考と実存的生の変化の相関という問題について、我々が根拠をもって言いうるのはおよそ次のようなことだと思われる。

この時期に彼の哲学的思考と実存的生の双方に重大な変化が生じたこと自体、我々に残された様々なテキスト（『論考』、『探究』、手稿、日記、手紙、等）に刻まれた痕跡から直接に知ることができる。そしてこれらの変化の間に有意義な相関・連関があったことも、それらのテキストを巡るさまざまな間接的証拠から、およそ疑いえないことである。何より「日記」の存在自身がその最大の間接的証拠である。この日記が、現にそれが書かれた期間（1930-32、1936-37）に現にあるような形と内容で書

かれたという事実、そしてそれが彼の生涯で書かれた唯一の独立した日記帳であるという事実は、この重大な時期に彼の哲学的思考と生に相互に連動した変化が生じたという想定なしには、およそ理解しがたい現象である。しかしこうした相関の具体的な姿を、我々に与えられたテキストからつきとめることは極めて困難である。なぜなら、こうした相関が直接言語的に表現されることは現実に皆無であり、我々の手元に残るのは連間の不明な事象の時間的順序だけだからである。例えば a という日付を持つ記述からその時点である哲学的思考の変化が生じていることが知られ、それよりも後の b という日付の記述からその時点である実存上の変化が生じていることが知られるとしても、そこからこの哲学的思考の変化がこの実存上の変化を導いたとか誘発したと言うことはできない。なぜならこれらのテキストから我々が結論できるのは、この哲学的思考の変化が a までに完了し、この実存上の変化が b までに完了していたということだけだからである。それぞれの変化が実際にいつ生じたのか、その順序や相関はどのようなものなのかは、テキストという表面からは見えない水面下に相当するウィトゲンシュタインの精神において進行しているからである。両変化の相関は、それぞれの完了のテキスト上の痕跡以外に、両者を結び付けるような第三の手掛かりが存在する場合のみ知り得ることであり、従って「解説」での私見のように、両者の一般的な相関について語ることはそもそも不可能なのである。我々が語りうるのは個別のケースにおける具体的な相関のみであり、それも両者を結び付ける第三の手掛かりが存在する場合のみなのである。

「日記」の解説執筆以降の『探究』、「日記」、手稿の研究を通して、こうした第三の手掛かりによって私が両者の相関を確信できたケースは二つにすぎない。ただそれらは『探究』が『探究』として生まれるためにどうしても必要な決定的変化に関わるものである。鈴木氏への返答として重要なのは、そのいずれにおいても哲学的思考が実存的变化を導いたのではなく、先行する実存的变化によって初めて哲学的思考の転換が可能となったということであり、「解説」の私見は二重の意味で誤っており、不十分な考察に基づいたものであったと言わなければならない。これら二例の変化相関(あるいは、相関変化)は拙著『『哲学探究』とはいかなる書物か』の考察の土台となったものであり、そこで大きな叙述の一環として述べられているが、以下本節と次節でその概略を改めて主題的に示したい。

第一の相関変化は「茶色本」から『探究』への決定的移行の開始に関わるものであり、日記上では、4年以上の中断の後、1936年11月に日記の記入が再開されるとい

う出来事としてその痕跡を残している。表面上は類似しながらも本質において決定的に異なるこれら二つの書物<sup>1)</sup>の一方から他方への移行がウィトゲンシュタインにとって極めて困難なものであったことは、1936年8月に開始された手稿ノート MS115 上での「茶色本」をドイツ語に書き換えて『探究』を制作するという当初の試みが、「一切価値がない」という書き込みとともに放棄されたという事実が何よりはっきりと物語っている。おそらくそのすぐ後にウィトゲンシュタインは後に MS142 と名付けられる新しいノート（最初のページに「1936年11月初め」と記されている）にドイツ語で一から『探究』を書き始め、このノートの原稿は遅くとも翌年夏ごろまでには完成し、周知のように、それが現『探究』の§§1-188の最終原稿となった。これが1936年11月前後の時期に彼の哲学的思考に生じた大きな変化である。この同じ時期（厳密には1936年11月19日）に彼の実存過程において、5年近く中断していた日記の記入を再開するという大きな変化が起きる。日記記入は翌年4月30日まで継続され、その間に様々な宗教的体験と思索により彼の実存は大きな変化を蒙る。この期間の後、日記記入は1937年9月24日の孤立した記述を例外として二度と行われず、同様の日記帳が再び作られることもなかった。このように『探究』の最初の決定稿が生み出された1936年11月から翌年夏に至る重大な期間において、彼の哲学的思考の新たな形成過程と実存的生の変化の間には見事な並行性が存在しており、両者の間に何らかの相関があった事はおよそ疑いえない。

これら両者の具体的相関を探るうえで、我々が手掛かりとして問題にしたいのは、1936年11月にウィトゲンシュタインの哲学的思考と生のそれぞれにおいて新たな過程が開始されるという変化が生じたが、これら二つの事象の間にどのような連関があったのか、ということである。この時期、先ず彼の哲学的思考に決定的変化が生じ、それによって彼の実存的生においても重大な変化が生じたのか、あるいはその逆なのか、それとも第三のより根本的変化が先行し、それが二つの変化を引き起こしたのか、という問いである。この問いに答えるためには、二つの変化を結び付ける何らかの手がかりが、我々が所有する証拠（日記、手稿、『探究』、等）の中に存在するのか、するとすればそれは何か、というもう一つの問いに向き合う必要がある。そして、この第二の問いに対する私の答えは「それは存在する、告白に関する日記の記述がそれである」というものであり、この答えに基づいて我々は第一の問いに対して、「実存的生における決定的変化が哲学的思考の決定的変化を可能にした」と答えられるのである。これがどのようにして第一の問いに対する（妥当性を持った）答えなのか示す

ためには、上で述べたように二つの変化を繋ぐ第三の手掛かりが不可欠であるが、それが「ある精神の在り方と、その精神が書き得るものの哲学的質の相関」という概念なのである。言い換えるならそれは、哲学者が書き得るものの哲学的質（その高低）は哲学者の精神の在り方に依存し、自分の精神の質を上回る質を持ったものを哲学者は書けない、という考えであり、哲学的文体論と呼びうるものである。この文体論によってウィトゲンシュタインの実存と哲学的思考（とその表現としての文章）を結び付けるとき、我々は1936年11月前後に彼に起こった二重の変化の全体を次のように描写できるだろう。

そもそもの発端は同年8月から始められた「茶色本」を『探究』に書き換えるという試みの挫折と放棄である。もしここで彼が直面していた困難が、未解決の新たな問題の出現とか、それまでに見出した答えの誤りの発見といったものであれば、すなわち哲学的思考をさらに重ねることにより解決可能な問題ならば、なすべきは試行の放棄ではなく、修正や中断であったと思われる。試行そのものを放棄し、全く新たな形で再開したということは、直面していたのが更なる思考によって解決可能な個々の問題ではなく、哲学的思考に基づいてものを書くという行為全般に関わる問題、例えば文体上の問題であったのではないかと推測されるのである。すなわち自分が書くものが「まがいもの」とか「表層的」と感じられ、その原因が自分自身の在り方に内在するごまかし（例えば自分が本当はそのような哲学者（あるいは人間）ではないのに、自分と他者の双方に対して、そのように振る舞い、演じていること）だと本人が感じざるを得なかったのだとしたら、彼にとって何よりも先に行うべきことは、自分の中の虚偽、偽善を解消することだったであろう。実際に彼がこうした偽善（善を演じる）という問題を抱えながらも、それから逃れられなかったことは、日記前半の記述から明らかである。自分に対して善を演じることを止められないことが、そこでの彼の最大の問題なのであった。それゆえ、もしこの時彼に、自分の周りの人間がウィトゲンシュタインにより演じられた像を実像と錯覚していた事を知りながらそのままにしていたという自覚があったとすれば、それがどのように些細な事であっても、それが虚偽でありながらそのように人に思わせていたことをその相手に告白することは、自己の内部の偽りと決別する手段として彼にとっては決定的な意味を持っていたと考えられる。こうしたことを念頭に置き、再開された日記の最初の記述がヘンゼルに対する自己の嘘に関する告白の記録である（「およそ12日前、ヘンゼルに自分の家系に関する嘘についての告白を書いた」『哲学宗教日記』p.102）ことを想起するなら、



彼にとって告白が自己の在り方の転換（内なるごまかしの根絶）のために必要な行為であり、自分に許容できるような哲学的文体を得るために（＝哲学的著述を自己嫌悪なく継続するために）この時彼にはそれがどうしても必要だったと推測されるのである。こうしたことを前提とすれば、その後彼が年末年始にウィーンとケンブリッジで家族と友人に対して行った有名な告白が、彼にとってどのような意味を持っていたかも明らかとなるだろう。

以上の相関変化の描写は、仮想の哲学的文体論に基づいて進められてきたが、この文体論は私の想定ではなく、実は 1938 年 2 月に手稿ノートに書かれた次のようなウィトゲンシュタイン自身の考察の要約である（前掲拙著、pp. 41-42 参照）。

自分自身について自分に嘘をつくこと、自分がまがいものであることについて自分に嘘をつくことは文体（スタイル）に深刻な影響を及ぼさざるを得ない。何故なら、その結果、自分の中の本物とまがいものを区別できなくなるからだ。マーラーのスタイルがまがいものであることは、こうして説明できるだろう、そして私にもその危険がある。

人が自分自身に対して演じるとき、文体（スタイル）はその表現とならざるを得ない。その時文体は自分のものではありません。自分自身を知ろうと欲しない者は、ある種のごまかしを書くのだ。

自分自身の中に、それが痛みを伴うという理由で、降りてゆこうとしない者は、当然のことながら自分の書く物においてもまた、表層に留まらざるを得ないのである。（次善の物しか欲しない者は、善きものの代用品にしか手が届かないのだ。）

（1938 年 2 月 19 日、MS120, p. 72v）

この考察は、1936 年 11 月前後に彼が直面した哲学上の行き詰まりと、告白によってはじめてその行き詰まりを脱却したという自らの体験を振り返り、哲学的文体論として析出させたものだと考えることができるだろう。「そして私にもその危険がある」という彼の言葉は、こうした解釈を強く支持するものである。この文体論は、こうした解釈によって最も深く理解できるように思われる。

#### IV.

我々に確認できる相関変化の第二のケースは、1937年1月27日から2月8日まで、実存上の記述と混在する形で日記上に記された論理の対象となる諸概念（「名」、「命題」）の理念性を巡る一連の哲学的考察に関わるものであり、「解説」第七節の結論の誤った土台となったものである。この一連の考察と、その結果ウィトゲンシュタインがたどり着いた「理想」に関する新しい態度、考え方は、「茶色本」と『探究』の本質的相違を構成するものであり、『探究』を通じて彼が到達した哲学的見地の始原（アルケー）というべきものである。この一連の考察の始まり（1月27日）において、問題はまず論理とその対象の「崇高性」を巡るものとして捉えられているが、このことは「論理はいかなる意味で崇高なのか」という『探究』§89冒頭の問いかけ（謎めいていると同時に『探究』理解の核心となる問いかけ）の直接の起源が日記上のこの考察であることを示唆している。

ウィトゲンシュタインにおいて哲学的思考が実存的生を導いたという私の「解説」の誤った結論は、現在の見地から見れば、この一連の記述に対する次のような誤解に基づいて生まれたとすることができる。「解説」執筆当時私は論理の崇高性、あるいは「理想」を巡る日記上の一連の考察を一体のものと漠然と考えていた。そのうえでそれを、その後が始まる一連の宗教的体験と考察の記述と対比させ、この時間的順序を根拠として、哲学的思考が実存的变化を導いたと考えた。確かにテキストを巡る客観的事情は、1月27日に始まった哲学的考察の記述は2月8日に終了し、その後再び日記に登場することはなく、他方2月8日の次の日記記入は2月13日であり、この日から圧縮された大量の宗教的実存的記述が3月15日ごろまで続き、明らかにその結果ウィトゲンシュタインには新しい形の信仰が生まれている。しかし上で述べたように、このことが示すのは二つの変化過程が完了した時点の順序にすぎず、それぞれの過程がどのように生まれ、変化し、その中で相互にどのような連関があったのかに関しては何も語っていないのである。ここから上述の私見を導くことは、事態の具体的な相を無視した粗略な見方から安易な結論を導くことに他ならない。こうした態度からウィトゲンシュタインの思考と生の相関の実相を見ることはできない。

だが他方、日記に記された彼の思考と生の痕跡をより丹念にたどると、両過程の相関に関する重要な手がかりが存在することがそこから浮かび上がってくる。この手掛かりを見出すために、クリスマス休暇が明けて再び孤独の中で哲学的考察に没頭するためノルウェーに戻る途中から再開された日記の叙述を、「理想」に関する考察が完了する2月8日まで順に追ってゆこう。1月27日、キリスト教と信仰に関する長い考



察のあと、論理の対象の性格に関する考察の記入が初めて登場する。そこでは、「我々の対象は崇高なものである（と思われるのだ）、それゆえ我々の探求は些末な、そしてある意味で不確かな対象に関わるのではなく、破壊できないものに関わるべきなのだ（と我々は信じたいのだ）」（『哲学宗教日記』 p. 108）という潜在的なジレンマを暗示するようなスタイルで論理の対象の存在論的地位に関する根本的な問題（＝理想の地位に関する問題）が提起される。この問題に関するこの日の考察は、「もし我々の探求が語と文を扱うならば、語がかすれているとか、読みづらいといったことがありうる意味での語や文ではなく、それよりもっと理想的な意味での語や文を扱うべきだろう」（同、p. 108）という言葉で終了し、この時点でウィトゲンシュタインが論理の対象の存在論的性格に関して『論考』的立場から全く脱却していない（それ以外にどのような考え方があるのか見当がつかない）ことを示している。その後、1月30日、31日、2月2日に、同じ問題に関連して、質、量、共にそれほど目立たない考察が記されたのち、突然2月8日に論理の対象と理想の意味に関する全く新しい見解（『探究』を特徴づける根本的見解）が一挙に出現する。この1月27日の論理と理想に関する問題提起と2月8日の新しい見解の提示の間には、明らかに大きなギャップ、飛躍が存在する。哲学的考察を記録するテキストをたどる限り、論理の対象の存在論的位置と理想の意味に関する『論考』的立場からウィトゲンシュタインがどのようにして、全く新しい考えを見出し、そうした立場に移行したのか、全く分からないのである。それは全く理解しがたい現象に留まる。

しかし問題が提起された翌日の1月28日の記入を見ると、このギャップを埋めようような、ウィトゲンシュタイン自身の実存に関わる自己省察的な考察が登場するのである。それは彼自身の実存の自己省察に基づいた実存上の哲学的考察とも呼びうるものである。この考察のキーワードが「理想」であり、この言葉/概念を介してこの考察は論理に関するウィトゲンシュタインの哲学的考察と理想に関する彼の実存的問題を結びつけ、論理を巡る哲学的思考の飛躍を可能としたのではないかと推測されるのである。

この1月28日の記入は、ノルウェーに向かう途上の埠頭での体験とそれに関する考察から成っている。この日埠頭で船を係留しているワイヤーロープを眺めていたウィトゲンシュタインは突然、ロープの上を渡れ、という考えに襲われ、同時にその考えにひるんだ。この体験からウィトゲンシュタインは自分が人目を気にして自由ではないことを悟り、人を自由にする信仰あるいは根本的信念を持っていないことを悟

る。こうして彼は自分の弱さを改めて自覚し、それを日記に記すのだが、それに続いて、そしてそれについて次のような考察を行う。

英雄でない、というのは一つの弱さである。しかし英雄を演じるというのは、つまり決算において自分の負債を明確に、曖昧さを排して告白する勇気を一度も持たない、というのは、さらにもっとひ弱な弱さである。(『哲学宗教日記』p. 109)

そしてこれに続いて、ここで述べられた考えを「理想」という概念を用いて、より普遍的で、明確な形で次のように表現する。

理想を持つのは正しいことである。しかし自分の理想を演じようと望まないのはなんと難しいことか。そして理想を自分から切り離して、それがあがるがままの場所に置いて見るのはなんと難しいことか！(同、pp. 109-110)

自己の実存の自己省察(=自分の弱さを正面から見つめること)に基づいた人間の在り方に関するこの二つの哲学的考察とウィトゲンシュタイン個人の在り方(現在と過去の自分の在り方)の関係について改めて考えてみよう。最初の考察において「英雄でない」という表現は、人目を気にして自分の信念に基づいて自由に行動できなかったウィトゲンシュタイン自身の弱さを指している、と同時にそれに類した人間の弱さを象徴的に表現している。そしてこの考察では、この弱さに関して三つの価値的段階が想定されている。第一は英雄であること、第二は英雄でなく、英雄を演じないこと、第三は英雄でなく、にもかかわらず英雄を演じること(それゆえ外部からは英雄と見られること)である。この考察のポイントは、第二が第一より弱い存在であることはもちろんだが、外見的に第一と区別がつかない第三は、見かけ上第二より強いが、実際はそれよりさらに弱い、ということである。ここで問題になるのは、この時点でのウィトゲンシュタイン自身の在り方が第二なのか第三なのか、ということである。自分の弱さの自覚を契機としてこうした考察を行っていること自体、すなわち英雄を演じるのかいかなることなのかを自覚していること自体、彼が最早第三の在り方には無いことを示している。第三の在り方とは、英雄でないにもかかわらず、英雄でありたいがあまり、自分が英雄でないことを認めない在り方であり、英雄を演じているのにそのことに気づかない在り方だからである。ではこの第三の在り方とは誰を指すのだ

ろうか。明らかにそれは、日記前半において、自己の虚栄心から逃れようとしながら、同時にそのことによって自分の演じられた謙虚さを認めて喜んでいたウィトゲンシュタイン自身である。自分に対して謙虚さを演じ、そうした自己の謙虚な外面を見て喜んでいた彼自身である。善を演じることに喜びを感じていたがゆえに、それを演じることを止められなかった彼自身である。それゆえこの考察において、英雄でないのに英雄を演じるという第三の在り方を明確に言語的に表現し、それが英雄でないことを認め、あえて英雄を演じようとしないうことよりも劣っているのだということを明言することにより、ウィトゲンシュタインは日記前半期の自分の偽善的な在り方を覆い隠すことなく批判的に対象化し、それとはっきりと距離を置くことに成功したのだと言えるだろう。そして「英雄」を「理想」で置き換えた次の考察により、我々が望ましいと思いながら、現実がそれには達していない様々な性質全般に対して我々がとるべき態度を、「理想を持つのは正しいことであるが、現実がそれに達しない場合、無理にそれを演じようとしないうこと」として表現しているのである。この指針はもちろん、強さ、謙虚さ、誠実さ、愛、といった実践上の理想についてあてはまり、それがこの考察の第一の目的である。しかしこの考察は、厳密さ、正確さ、確定性、無矛盾性、といった理論的諸概念を支配する論理上の理想について我々がどのような態度をとるべきか、という問題にも大きな手掛かりを与えるのである。現実の言語が論理の要求する理想的な厳密さを持っていない場合、なお『論考』のように、表面から隠された深層においてあらゆる命題は理想的厳密さを持っているはずだと考えるのは、こうした観点からすれば、理想を演じるに似た行為、いわば現実に理想的真理を押し付けることとしての偽真的行為だと言えるだろう。

それゆえ実践上の理想を巡るこの考察が、理論上の理想に対する新しい態度の可能性をウィトゲンシュタインに示し、そのことにより論理を巡る彼の考察が新しい境地に達したというのは、単なる可能性を超えた、拒みがたい力を持つ像だと言えるだろう。つまり、1月27日の考察では論理の対象は崇高でなければならないという『論考』的思考の閉域から未だ抜け出られなかったウィトゲンシュタインの精神が、自己の実存に対する反省的考察と理想に対する新しい態度の発見を契機として、2月8日の新しい論理観、理想観に到達したというのは、理解不能なことがそれによって初めて理解可能となるという意味で、ひとつの強力な描像だと言えるのである。『論考』から『探究』に至る重大な転換の時期、その決定的な局面でウィトゲンシュタイン自身の実存上の変化とそれに対する自省的考察が、それ以外には可能ではないような仕

方で彼の哲学的思考を、以前には考えられなかったような場所へと運ぶ手助けをしたということは、我々がこの変化を理解可能なものとして捉えるために必要な決定的前提であるように思われる。

---

<sup>1</sup> 両書の類似性と決定的相違に関しては前掲拙著の第一章 1.2, 1.3 を参照されたい。同様に本節で述べられている二例の相関変化の詳細と文献的上の根拠についても、同書第一章と第四章 5.2 を参照されたい。

<sup>2</sup> その核心は2月8日の記述に示されている。理想に関する新しい見地と、それに到達するためにウイトゲンシュタインが克服しなければならなかった根本的誤解(理想誤解)が前掲拙著第三章の主題であり、それを理解することは『探究』という書物の意味を知ることにとって決定的な意味を持っている。

(きかい・あきお 筑波大学人文社会系教授)